

こども・子育て分野における生成AI 利用等に係る調査研究
第5回検討委員会
第4回検討委員会の振り返り

令和7年3月4日

アビームコンサルティング株式会社

目次

1. 第4回検討委員会での意見交換の論点
2. 第4回検討委員会でいただいたご意見と対応方針

1. 第4回検討委員会での意見交換の論点

- 令和6年12月25日(水)に開催された第4回検討委員会では、下記の議題を取り扱いました。
- 特に「**生成AI利活用ガイドライン**」、「**実証状況報告**」について、委員の皆様から貴重なご意見をいただきました。
- いただいた主なご意見とその対応方針について、次頁以降でご提示いたします。

第4回検討委員会の議題とその概要

No.	議題	概要
1	第3回検討委員会までの振り返り	- 第3回までの説明内容の概要 - 委員意見の要旨および対応方針
2	生成AI利活用ガイドラインのご説明及び委員協議	- ガイドラインの章立て、記載イメージの共有 - ガイドライン本体、レイアウトの説明
3	実証事業の実施状況報告及び委員協議	- 実証事業の全体進捗の報告 - 各団体の取組、課題、リスクの共有
4	事例調査の実施状況報告	ヒアリング調査の報告

ご意見をいただいた主な論点

議題	論点
生成AI利活用 ガイドライン/ 実証状況報告	① 実践編レイアウトの修正 ② 測定結果の取りまとめに係る留意点 ③ 掲載情報の追加・変更に関するご意見 ④ 生成AI導入による保育現場職員への影響

▶▶ 次頁から説明

2. 第4回検討委員会でいただいたご意見と対応方針

2.1. 論点①：実践編レイアウトの修正

- 論点①「**実践編レイアウトの修正**」について下記のとおりご意見をいただきました。
- ご指摘いただいた**事例イメージ図の拡大表示とスライド構成の変更**を含めた修正を行います。
- なお、現在こども家庭庁様と内容の詳細について協議を進めているため、**具体的な記載内容を含めた資料のレビュー時には、現状お示ししているレイアウトや項目構成に変更が生じる可能性があること**をご了承ください。

委員意見（抜粋）及び今後の対応（案）

論点①：実践編レイアウトの修正

委員意見の要約

- ・ **事例イメージ図が小さく**、内容によっては現在の縮尺では**詳細な情報が読み取りにくい**。
- ・ 実務者の視点から、課題とその解決策を対照的に配置することで、資料の理解が促進されと考えられる。また、事例**イメージ図は小さいと感じる**。



レイアウトを修正し、それに基づいて内容を作成する。

具体的な取組

委員意見を踏まえて、こども家庭庁様と協議の上で構成・レイアウトを確定する。

事例のイメージ図は大きく配置できるよう、項目全体の配置を見直し、**スライド3枚で構成する**方針で修正する。

（アジェンダ4「生成AI利活用ガイドラインに関するご説明」で現時点案を提示）

2. 第4回検討委員会でいただいたご意見と対応方針

2.2. 論点②：測定結果の取りまとめに係る留意点

- 論点②「測定結果の取りまとめに係る留意点」について下記のとおりご意見をいただきました。
- 導入効果のような**今後の横展開に向けて重要な項目**については、定量的なデータに基づく**客観性の確保**と、背景要因や阻害要因を含めた**分析の充実**に留意して作成します。

委員意見（抜粋）及び今後の対応（案）

論点②：測定結果の取りまとめに係る留意点

委員意見の要約

- ・ 生成AIの実証実験期間が短かったため、現場職員が十分に操作に習熟できていない状況での測定となった可能性がある。そのため、測定結果が本来の効果を十分に反映していない可能性も考慮する必要がある。**実証結果の報告においては、測定期間が短いことによる評価の制約について留意する必要がある。**
- ・ 一部の実証団体において、生成AI導入の目的や利用方法について、現場レベルまでの理解浸透が不十分だったのではないかと。特にデジタル化に着手したばかりの団体では、急な生成AI導入により現場での混乱が生じ、測定結果にも影響を与えた可能性がある。**数値が期待を下回る結果となった場合も、その背景要因を詳細に分析する必要がある。**
- ・ 現在の測定結果（KGI・KPI）はアンケート調査による職員の主観的な評価に基づいている。**業務時間のような客観的なデータを活用した分析を追加することで、より精度の高い効果検証が可能になるのではないかと。**
- ・ 業務のデジタル化の状況により、効果の現れ方は異なると考えられる。具体的には、完全な手作業からICT化及びAI導入を行う場合と、既にICT化が進んでいる状態でAI導入を行う場合では、得られる効果が異なるはずである。そのため、**実証開始前の状況を具体的に把握することで、効果を適切に評価できると考えられる。**

客観的なデータに基づいて導入効果を検証し、効果が期待を下回った事例については、その要因を詳細に分析して記載する。

具体的な取組

下記のとおり、読み手に各事例の効果・課題を齟齬なく理解してもらえるよう、測定結果の分析・取りまとめを行う。

- A) 実践編での測定結果の記載の際には、**現場の実感が伝わる定性的な評価（「利用者の声」等）と、システムログ等の数値データ等に基づく客観的な効果測定（KGI・KPI等）**の観点で整理する。
- B) **期待された効果が得られなかった団体・ユースケース**については、測定結果に加えて、**その背景要因の分析結果**を具体的に提示する。

2. 第4回検討委員会でいただいたご意見と対応方針

2.3. 論点③：掲載情報の追加・変更に関するご意見

- 論点③「**掲載情報の追加・変更に関するご意見**」について下記のとおりご意見をいただきました。
- 委員の皆様からいただいたご意見は、**実証団体の最終報告内容の取りまとめ時の留意点**として参考にさせていただきます。

委員意見（抜粋）及び今後の対応（案）

論点③：掲載情報の追加・変更に関するご意見

委員意見の要約

- ・ **各事例で利用した具体的なサービス名の記載をしてほしい**。団体によっては、アイディ出しのような日常の業務負担軽減は標準搭載のMicrosoft Copilot等で既に実施しており、実証のユースケースのような複雑な特定の業務について別途生成AIサービスを利用していることもある。
- ・ バグの発生による回答中断による事務の非効率化は、ユースケース特有ではなく、広く発生すると考えている。**実証で観測したケースについて詳細な状況を聞き取っているのか**（どういったバグか、どれくらい手間がかかったか、どういう追加対応が必要になったか、それに対する職員の感想 等）。
- ・ 「**おたより**」と「**連絡帳**」は**性質が異なる文書**であり、おたよりは均一な文章でも問題ないが、連絡帳は複雑な記載が求められており、保育士が各家庭の事情や幼児ごとに異なる情報を判断しながら高度な文章作成をしている。**事例としては集約せず、分けたほうが良いのではないか**。



ご指摘事項については、実践編の内容を取りまとめる過程において留意する。

具体的な取組

以下のご指摘事項については、実証団体の最終報告内容の取りまとめ作業において留意する。

- A) 具体的なサービス名については、当初の計画どおり、原則**別添の実証結果報告書に記載**する。
利用したサービスの性質や種類について、**ガイドライン本体でも記載が必要な場合は製品名を明示しない形で言及することを検討**する。
- B) バグ発生等の確認事項は、**実証団体との月次定例等を通じて状況を確認**する。その結果、**実践編への記載が必要と判断された事項については、適切に内容を掲載**する。
- C) 事例「**保育施設職員のおたより・連絡帳等の作成支援**」については、**こども家庭庁様と協議の上、事例の分割を検討**する。ただし、掲載する事例数の増加に伴う作成負荷も考慮して判断する。

2. 第4回検討委員会でいただいたご意見と対応方針

2.4. 論点④：生成AI導入による保育現場職員への影響

- 論点④「生成AI導入による保育現場職員への影響」について下記のとおりご意見をいただきました。
- 保育士人材の育成の観点から、生成AIの導入範囲における慎重な検討や保育現場での生成AIの普及を見据えたスキル育成についてご意見をいただきました。今年度の実証の中では、保育現場職員（特に保育士）の育成に対する影響を定性的に計測していなかったものの、**実証を実施した中で得られた示唆としては重要と考え、実践編への反映を中心に、ガイドラインに示唆を掲載する方針**といたしました。

委員意見（抜粋）及び今後の対応（案）

論点④：生成AI導入による保育現場職員への影響

委員意見の要約

- ・ ネガティブな意見のうち、「保育士の成長機会が失われる」という意見は重く捉えるべきではないか。**生成AIに文章作成を肩代わりしてもらうことは保育士個人の成長機会を奪う可能性があり、今後利活用を進める際の阻害要因として大きい。**ただし、保育士の成長機会の実証内で客観的に測定しておらず、あくまでも利用者（職員）の一意であることを踏まえ、反映については慎重であるべきと考える。
- ・ 医療現場において、画像診断AIの利活用を前提に医学を教える必要が出てきているのと同様に、**生成AI利用を前提とした資料作成スキルの育成にシフトするよう、保育士の教育課程へのフィードバックが必要ではないか。**当然、実証現場の保育士は生成AIによる業務支援を前提とした業務教育を受けていないため、利活用への適応が難しい。



「保育士の成長機会」に関する意見は実践編に、「保育士の教育課程へのフィードバック」に関する意見は基礎編または実践編に示唆として掲載する。

具体的な取組

- A) 「保育士の成長機会が失われる」といった**実際の職員（利用者）の意見は「利用者の声」として実践編に記載する。**
- B) 保育士の教育課程については**実証では確認していないため断定した情報として掲載することは難しいが、教育の改善必要性についての示唆は保育施設に関連するユースケース全てに当てはまるため、共通した留意事項として基礎編または実践編に盛り込む方針で検討する**（例：職員の人材育成方針や現場のICT利活用状況を考慮し、段階的な導入アプローチが推奨される。等）。



アビーム、ABeam及びそのロゴは、アビームコンサルティング株式会社の日本その他の国における登録商標です。
本文に記載されている会社名及び製品名は各社の商号、商標又は登録商標です。©2025 ABeam Consulting Ltd.



Build Beyond As One.